俺とテストと遊戯王

スターダスト１９

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺とテストと遊戯王

【Ｎコード】
Ｎ２１００ＢＡ

【作者名】
スターダスト１９

【あらすじ】
ここは文月学園。
高等学校で、最新設備を誇る学習施設である。
そんな学校に通っている生徒たちの、ギャグストーリー。
「あ、あのぉ・・・」
目の前には青い髪の毛の少女がいた。
これがすべての始まりだった。
普通じゃない学校でおこる、あり得ないストーリー。

遊戯王と、遊戯王の霊使いさんたちにもとうじょうしてもらっています。

第０章　プロローグ（前書き）

読者のみなさん初めまして。スターダスト１９です。
初心者なので、抜け落ち等あれば、ご了承ください。ごめんなさい・・・
まず、バカとテストと召喚獣の舞台をお借りしています。そのため、小説やアニメで出てくるワンシーンも使わせていただくことがあります。（キャラはちょっと触れるくらいです）
次に、遊戯王ですが、霊使いの方に協力していただいています。あと、オリジナルカードもたびたび登場させます。
あと、プロローグは物語設定の参考程度に考えて下さい。
その点を踏まえてお楽しみいただければ幸いです。
では、どうぞお楽しみください。

第0章　プロローグ

プロローグ

「いくぞっ。スターダストドラゴンで攻撃！」

ＬＰ８０００　ｖｓ　ＬＰ　０

ふぅ、やれやれ。毎日これの繰り返し。異常に疲れた・・・

「流石だな、久斗。ま、先生に勝ったことで浮かれちゃだめだぞ。」

と、いまさっきまでデュエルをしていた坂本先生が言う。

「大丈夫ですよ。俺はバカだけど、そこまで調子のりませんから。」

「ならいいがな。」

・・・まったく、この先生もこの先生だ。生徒相手に１Ｐも削れなかったんだから。

「やっぱつええな、お前。」

俺の悪友、吉見　陸だ。口ではそう言ってるけど、コイツもつよい。確か、ヴァイロンだったかな。

「いやいや、おまえだって、余裕で倒せるだろうが。」

これがいつもの俺の毎日。放課後、授業が終わってから誰かの相手をしている。

「祥平さんよぉ、素直に喜べばいいじゃんか。」

また俺の悪友、荻野　隼人、だ。こいつのデッキは、忍者だったハズ。

「確かに強かった」

コイツも俺の悪友、山下　祐輝だ。こいつはエグイ。なんだよラビットラギアって。

良くわかんないけど、なんでか俺含むこの４人が強いってハナシだ。

別に俺は強くなんかないんだけどなぁ。　ともかく、この４人でいつも腕を磨き合ってる。

・・・まぁ、強いって言われるのは嫌じゃないけどね。

俺以外のこの三人も大変だろうなぁ。俺もだけど、下手したら1につに十何人も相手しないといけないからね。ちなみに今日は一番相手が多かったのは俺だ。

疲れた。眠い。帰って寝よう・・・

「なぁ、祥平、帰りにゲーセンでも寄ってこうぜ。」

「あ、それええなぁ。」

・・・隼人、陸。君らは鬼か。

「まぁいいけどさ、早く帰りたいからなるだけ早めに頼む。」

こんな俺の日常が思いっきり覆されるのは、いつもと変わらない日だった。

★

ゲーセンからの帰り道、突然声をかけられた。

「あ、あのう・・・」

それがすべての始まりだった。

第０章　プロローグ（後書き）

はじめて小説をかいて、緊張しまくったスターダスト１９です。
読者の皆さま、読んでいただき本当にありがとうございます。
文章力は今からつくんでしょうか・・・
とりあえず、いまある小説ネタは今日中にのせてしまおうと思っているので、そちらの方もよろしくお願いします。

登場人物紹介（前書き）

今回は登場人物をまとめておきます。

登場人物紹介

★登場人物★

久斗　祥平　（ひさと　しょうへい）　Ｆクラス

バカテスでいう吉井　明久みたいな役割の人物。
遊戯王が得意。
勉強については、Ｆクラスの中では上のほう。
得意科目は国語・理科―（生物に限る）・遊戯王。
デッキはドラゴン族主体のシンクロデッキ。

エースカード　スターダスト・ドラゴン（シンクロ）

葵　エリア　（あおい　エリア）　Ｆクラス

ひょんな事から久斗家に住むことになった青い髪の少女。
遊戯王、勉強ともに良くできる。本人の希望でＦクラス入りとなった。
勉強については、努力で伸びるタイプで、ほぼ学年１位の実力を持っている。
若干抜け目の所もある。
得意科目は数学・国語で、苦手科目は英語―（それでも３００点以上取っている）。
デッキは水属性メインのシンクロデッキ。

エースカード　氷結界の龍　グングニール（シンクロ）

雅　ウィン　（みやび　ウィン）　Ｆクラス

エリアをおってきて久斗家に住んでいる緑の髪の少女。
遊戯王のプレイングタクティクスは抜群。
勉強は普通。本人の希望でＦクラス入り。
マイペースな性格。
得意科目は理科。―（５００点前後）。苦手科目が国語。―（２０点未満）他の科目は６０点前後。
デッキはドラグニティ。

エースカード　ドラグニティナイトーゲイボルグ（シンクロ）

荻野　隼人　（おぎの　はやと）　Ｆクラス

バカテスでいう坂本　雄二みたいな役割の人物。
遊戯王が得意。常日頃から久斗と悪だくみ―（？）を企てている。
勉強については、一応Ｆクラス代表レベルだが、他と大して変わらない。
得意科目は社会―（日本史以外）・体育・遊戯王。
デッキは忍者関連のカードを良く使う。

エースカード　機甲忍者ブレード・ハート　（エクシーズ）

夜神　ダルク　（やがみ　ダルク）　Ｆクラス

バカテスで言う木下　秀吉見たいな役割の人物。
外見から、色々なひとに女の子扱いされているが、戸籍上はれっきとした男。
荻野いわく『ダルクはダルクっていう性別』らしい。
勉強はあまり得意ではないらしい。得意科目は体育。
デッキは悪魔。

エースカード　幻魔皇　ラビエル―（効果モンスター）

有乃　高志　（ありの　たかし）　Ｆクラス

バカテスで言う土屋　康太みたいな役割の人物。
『寡黙なる性識者』で、ムッツリーニと呼ばれている。
保健体育の成績は、ずば抜けていて彼の総合科目の９０パーセントは保健体育である。
遊戯王はロック系のデッキを使っている。

エースカード　ダークシムルグ　（効果モンスター）

椿　美紀　（つばき　みき）　Ａクラス

バカテスでいう霧島　翔子みたいな役割の人物。
隼人と事実上つきあっている。
勉強については、最高レベルで、学年１位の学年主席。―（体育以外の科目は４００点越。）
遊戯王についても強く、なんどか公認大会で優勝している。
デッキは不明。

衛藤　光　―（衛藤　光）　Ｆクラス

バカテスでいう須川　亮みたいな役割の人物。
ＦクラスでＦＦＦ団という異端審問会―（人の不幸は喜べども、人の幸せはほっておかないがモットー）のリーダーをやっている。
勉強、遊戯王ともに興味を示さず、人の幸せをつぶしていくため日々努力している。

吉見　陸　（よしみ　りく）　Ｃクラス

久斗・荻野・山下とは中学校のころからの知り合いで、悪友。
遊戯王が得意。
勉強については、Cクラストップレベル。
得意科目は数学・社会・遊戯王。
デッキはヴァイロン。

エースカード　ヴァイロン・アルファ（シンクロ）

山下　祐輝　（やました　ゆうき）　Aクラス

久斗・荻野・吉見とは中学校のころからの知り合いで、悪友。
遊戯王に限らず、ほとんどの科目において優秀な成績を上げている。
勉強はオールマイティで、すべての科目ができるが、本人いわく苦手なのは国語。
学年2位の地位を築き上げている。
デッキはラビットラギア。

エースカード　エヴォルカイザー・ラギア（エクシーズ）

藤堂　カヲル　（とうどう　カヲル）　学園長

この物語の舞台、文月学園の学園長。
召喚システムを作った張本人であり、久斗・荻野からは、『クソババァ』や、『ババァ長』と呼ばれている。事あるごとに登場人物を巻き込む老婆。

西村　宗一　（にしむら　そういち）　補習教師

この学校の鬼の補習教師。

このことから生徒たちには、『鉄人』と呼ばれている。
趣味はトライアスロン、冬でも半そでという筋肉バカの教師。
ただ、生徒には真っ向から向かっていく性格で、ときたま優しい性格にもなる。

登場人物紹介（後書き）

・・・霊使いさんの名前、皆さん気がつきましたか？
霊術カードにでていたやつです。
たとえば、エリアさんだったら『水霊術ー葵』だとか。
でも、ですねぇ・・・
闇と・・・光が・・・ないんですよっっっ！
流石に『欲』ってのは名字には出来んっ・・・！
せっかくダルク君を秀吉扱いしようと思ってたのにっ・・・！
だから、勝手に名字つけました。
デスノートの主人公の名字だった気がします・・・夜神って・・・
あと、ムッツリーニキャラはどーしても必要だったので。
では、本編をお楽しみください。
（新しい重要人物が出てくるたび、このページは更新します）

第1問　俺とエリアとすべての始まり（前書き）

今回は物語の設定ということで、あんまりギャグはいれてませんが、よろしくお願いします。

第1問　俺とエリアとすべての始まり

俺は久斗（ひさと）　祥平（しょうへい）。
文月学園の高校2年生。この学校の特色は、授業にデュエルがあること。（遊戯王に限る）

それと、1年の終わりに行われる振り分け試験というもので、頭のイイ奴はAクラス、下はFクラスという成績累進式の教室設備がある。Aクラスは個人エアコンやリクライニングシート、冷暖房完備のうえ、個人パソコンまであるのに対し、Fクラスは畳にちゃぶ台。なんていう差別だろうか。
この状態を改善するには、試験の点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を使用した戦争「試召戦争」で勝ち上がり、上位クラスの設備を奪い取るしかない。また、遊戯王のモンスターを召喚獣の代わりに召喚できる。FクラスはLV3まで、EクラスはLV4まで、DクラスはLV6まで、CクラスはLV8まで、BクラスはLV10まで、Aクラスはすべてのレベルのモンスターを召喚できる。（テストの点数によって変化もある。）
これだと圧倒的にAクラスが有利だが、戦争するとき、下位クラスには『団結』する権利が与えられる。『団結』というのは、複数の生徒で1体のモンスターを呼び出すことだ。遊戯王のモンスターに限られるが、団結を使えば下位クラスでも上位クラスと互角の戦いができるというわけだ。
そして、まだ厳しい取り決めがある。
下位クラスが上位クラスに負けたとき、設備ランクが1つおとされ、逆に上位クラスが下位ランクに負けたとき、クラス設備を交換できる。また、戦死者（召喚したモンスターが破壊された者）は、その戦争終結まで補習を受ける義務を負う。そして、一度負けたクラスはその学期間の間宣戦布告できない。

これは、試召戦争が泥沼化しないための取り決めだ。
さて、面倒な説明はともかく、コイツをどうやって大人しくさせるか、が問題だな。うん。
「なにぃぃぃぃぃぃっ」　変態バカの衛藤　光。人の幸せを恨む異端審問会の会長だ。
「事情を聴いてほっとけなかったんだ。」

昨日のこと。

ゲーセンの帰り道、不意に声をかけられた。
「あ、あのぉ、カード、おとしましたよ？」といって俺がおとしたらしいカードをさし出してくる青い髪の毛の少女。
「あぁ、ありがとう。」受け取ってみると、『スターダスト・ギャラクシー・ドラゴン』だった。
危ない危ない。
「珍しいカードですね。見たことないです。」
そうだろうね。多分持ってる人なんてそういないんじゃないのかな。
「うん、俺のお気に入りだよ。というか、君、大荷物だけど、いったい何が――――」
しまったぁぁぁぁぁ！あんまり知らない人と関わりたくなかったのに、つい口が勝手に・・・・っ！
「え？えっと、これは・・・・その、あれですっ」力強く断言された。
あれってなんだよ・・・
・・・まぁ、この子に何かあるのは明確かな。
「なんか荷物重たそうだし、うちで休憩でもしていく？すぐそくだし」
「いいんですか？」「別に俺は構わないよ。」「じゃぁ、お邪魔します。」

★

「――――なるほど、事情は大体わかった。」
ところ変わって俺の家。ちなみに俺は自由気ままな一人暮らしだ。
親父の仕事の関係で、両親は海外にいる。んで、この子の名前が『葵　エリア』というそうだ。エリアって呼んでくださいって言ってたけど、流石にファーストネームはキツイ。ともかく、この子は親がいないらしく、この年まで施設に預けられて育ってきたらしい。んで、その施設がいっぱいいっぱいになり、最年長だったエリアが施設を出てきた、というわけ。・・・・・となると・・・・・
「なぁ、そんじゃエリアさんは生活する場所あるの？」
「えっと、ない、ですね」
そんなきっぱり言わなくてもいいじゃないか。
・・・・なんか、可哀そうだな。
「もし、よければ、ここに置いてほしいです。」
なんてことを言い出すんだ。この子は。
でも、絶対にいや、というとウソになる。どうするかなぁ。親に電話つながんないしなぁ・・・
「・・・・」「・・・・」しばし沈黙。
「・・・すいません、変なことを言っちゃって。忘れて下さい。」
俺は今、とても重要な、人生のターニングポイントにいる気がする。
「う～ん、まぁ、このままにして置いてなんかあったらいやだからね。いいよ。うちにいて。」
「ほんとにいいんですか？！」
・・・俺って信用ないのかな・・・
「うん、エリアさんさえよければ、俺は別にいいよ。」
「じゃ、じゃぁ、お言葉に甘えて・・・」
「あと、敬語じゃなくていいよ。」
「あ、はい、判りました。」

・・・思いっきり敬語じゃないか。
「まぁ、学校の事もイロイロ決めないといけないよね～」

★

「――――と、いうわけ。」
「A班は家庭科室に包丁を取りに行け。B班以降はカッターでもハサミでもいいから、出してこい」　衛藤もバカだなぁ。皆がそんなことする訳「「「イエッサー」」」な、なにっ！
「落ち着けお前ら！俺はただ――――」
【黙れ、邪教徒。誰もが踏み入れることの許されない領域を汚す悪人め。】
うん。
・・・・・君らのほうが悪人だ。
「まぁ、そういうわけだよ。」
「よろしくおねがいします。」俺の横で小さくなって挨拶をしているエリア。なんか妙にかわいい気がする・・・
【【【よろしくおねがいします～】】】
衛藤を代表として、挨拶の合唱。うん、吐き気がする。
「ね、ねぇ、祥くん、この人たち、大丈夫なの？」
恐らく大丈夫じゃないだろう。
・・・祥くん、といわれて、考え事に【あのバカ、また意識が飛んでるぞ】入る俺。
「えっと、なんてよんだらいい、かな？」
「『エリア』って俺は呼ぶけど、それがいいんだろ？」
コーラを飲みながら答える。
「うん。じゃあじゃあ、私は『祥くん』って呼ぶね♪」
そして、コーラを吹きだしそうになる。
「えらいまぁ略したもんだね・・・別に気にしないけど。」

【チョキの正しい使い方を教えてやる。】隼人の声。
ぶすっ。　あ、嫌な音。
（こ、声が出ないほど痛い・・・）
隼人のチョキが、俺の眼球にフレンチキスをプレゼントしていった。
（詩的表現）
「あ、だ、大丈夫？」
エリアの優しさが心にしみわたる。（あと目に涙と激痛も）
【さぁ、邪教徒、こちらをむけ】
声がした方に顔を向ける。（目が見えないからね。）
【そっちじゃない、こっちだ】
視界を奪われてどうしろと。
【お前は自分の罪を悔いあらため、罰を受けるか。】
「ちょっ・・・罰ってなに？！理不尽な。」
【特別バンジーの刑に処す。ひもなしの】
それは絶対に避けたい。
【さぁ。どうする。】
「どっちにしても、俺の死亡フラグに変わりはないじゃないかっ・・・」
【ふん、気がついたか。バカだから、気がつかないと思っていたんだがな・・・】
いや。気がつかなかったら重症だ。

★

「つ、つかれた・・・」
俺の家のリビング。家に帰ってソファーにダイビングした。
「イロイロお疲れ、祥くん。」
エリアの気使い。めちゃくちゃ優しい・・・
・・・エリアといると、異端審問会に殺されそうだけど、気が楽に

なる。不思議だ。
「まぁ、明日からも頑張ろうかな」
無意識に声に出してる俺がいた。

第1問　俺とエリアとすべての始まり（後書き）

どうも。スターダスト１９です。
読んでいただきありがとうございます。感謝感謝です。
今回はあまりギャグっぽいところがなかったですね。
次回は、おもしろくできたらいいなぁ・・・
突然の次回予告！
バカテスファンならだれでも知ってる、あの人達も登場させます！
（明久たちじゃないですよ？！）
では、次回予告っ。『第２問　俺と子供と召喚システム』
次回、お会いしましょう！

第2問　俺と子供と召喚システム【1】（前書き）

今回はなんと、子供の話？
そして、久斗家にまた訪問者がっ！

「・・・もう、すきにしてくれ・・・」ｂｙ学校を代表するバカ
「・・・終わった。俺の人生終わった・・・」ｂｙ学校を代表するカス

第2問　俺と子供と召喚システム【1】

エリアが俺の家に来てから1カ月がたった。
あいつは相変わらず男女問わず大人気で、俺は相変わらず命の危険と隣り合わせの状態だった。
と、いうかエリアが俺の家に来てから俺の負担がすごく減った。
「泊めてもらってるんだから、これぐらいはしないと、ね。」
といって、家事全般をやってくれている。嫌な顔一つせずに。
そして、判ったことがある。人って、自分の好きなことをやってるときは、すごいいい顔をしている。
それは、べつに顔が奇麗とかイケメン、とかそういう話じゃなくて、もっと、こう、なんていうか、奥が深い感じだ。たとえば、俺はエリアとよくデュエルしているけど、そのときのエリアの顔はなんか、言葉で言い表せない魅力で一杯だ。勝っても負けても、「あ～楽しかった」といえる。（ちなみにエリアはデュエルめちゃ強かった。）
そんな感じだ。エリアは心の底からデュエルを楽しんでいる。
・・・自分はどうなんだろうか。デュエルがすきだから、色んな人としょうぶしたいっていうのが俺の本心なのに、めんどくさいとか何とかいって距離を置こうとしてないだろうか。うーん。
「・・・ん・・・くん、おーい。」
「っ！え、あ、なに？」またぼーっとしていたみたいだ。
「大丈夫？」
「ああ、うん大丈夫。気にしないでいいからさ。」ホントに大丈夫なのか俺。
「あ、ひょっとして、ご飯、おいしくなかった・・・？」
「いやいやいやいや、そんなことないよ。めっちゃうまい。」
即座に否定する俺。これは本心だ。
・・・というか、エリアって家庭的で人当たりもいいんだよなぁ。
「そう？ならよかった。作りがいがあるよ！」笑顔でしゃべってく

る。
なんか・・・おちつくなぁ。うん
「・・・っ！」危ない危ない。またトリップするとこだった。今度は考え事じゃなく、みとれて。
『ピンポーン』
インターホンが鳴った。ナイスタイミングだぞ、インターホンもとい訪問者っ！
『・・・エリアさん、いますか？』
うらむぞ、インターホンもとい訪問者。というか、誰だろうこんな時間に。声からして、女の人？
「は～い」玄関に向かうエリア。一応俺も付いていくことにする。なにかあったらいやだからね。
「・・・こんばんわ」やっぱり女の人・・・というか少女、だ。エリアの友達・・・？あっあれはっ！
「隼人じゃないかぁ。椿（つばき）さんと、デートしてたの？（ニヤニヤ）」
俺が隼人を茶かす。
なんと、一緒に隼人も来ていた。
「たのむ、祥平。その話はリアルにやめてくれ・・・」しおれた隼人。
「やっほー、久斗クン。」めっちゃ元気な椿さん。

今日の昼のこと・・・

「あれ？隼人、なにやってんの？しかも、よこにいるのは、確か学年代表の・・・」
「うぐっ！な、なんでおまいが・・・っ。」

隼人ＳＩＤＥ
　ちくしょう・・・こんなタイミングでまさか出くわすとは思ってなかったっ！

誤解されちゃうんじゃないか？この展開！この状況！まずいまずい何とか言わないと・・・
「ん、はじめまして。椿っていいます。よろしくね～。隼ちゃんのカノジョなんだ～」
なんてことを～～～～っ！

祥平ＳＩＤＥ
　あれ、なんでコイツが？まさかっ！
「ん、はじめまして。椿っていいます。よろしくね～。隼ちゃんのカノジョなんだ～」
・・・・・・・・・・・・・・・ほほぅ。

「隼人。なるほどねぇ（ニヤニヤ）」
「やめてくれ、そんな目で俺を見るなぁ！」
「大丈夫だよ、隼人。俺たちは仲間じゃないか。」なんでコイツはこんなに取り乱しているんだろう。
「そ、そうだよな、俺たちは仲間だよな！だから・・・」
・・・ようじんぶかいなぁ、隼人は。
「「絶対にクラスの異端審問の会に（ばらすからさ！）（ばらさないよな！）」」
最後の単語だけ、隼人と意見がずれた気がするけど、まぁそんなこと気にしなぁ－い。
・・・お前も俺と同じ苦しみを味わえっ！
「そういや、俺、衛藤に用があるんだった。じゃぁねぇ～」
「・・・・・・（土下座）」
「ねぇ、隼人。邪魔だから、そこどいてくれないかなぁ」
「頼みがある！」
「やだなぁ隼人。そんな恰好で頼みなんて。」
「このことは誰にも言わないでほしい！」
「わかった。言いはしないよ。」

「まじか！・・・でも、なんでお前の手がさっきからケータイで文字を打ってんだ？」
「ああ、エリアに連絡してるんだよ」嘘だけど。
「じゃあ、内容確認していいよな。」
「ピッ・・・うん、いいよ。」

『To　衛藤　光

異端者発見。午後2時37分、ショッピングモールにて荻野隼人が学年代表の椿さんと一緒に仲良くお買い物をしながら手をつないでいた。だが、今取り押さえるのではなく、後日、学校で会にかけるのが得策だと思う。』

「・・・なっ？」
「・・・終わった。俺の人生終わった・・・」
「なんて、ジョークだ。まだ送信してない。」・・・嘘だけど。
「マジか？！恩にきる！」

と、いうことがあった。
そんなことを隼人とやり取りしてると、
「ウィンちゃんじゃない！どーしたの？」
「・・・私も、出てきた。今日、偶然エリアちゃんをみたから・・・」
「行くあてがないんだったらさ、今日から一緒に暮らそっか！」
「・・・いいの？」「当然！」
・・・あれ？なんか俺の知らないところで話が進んで行っている気がする。
「ターーーーイム！」
「どうしたの祥くん。」
「いや、どうしたもこうしたもないからさ！」

「・・・今日からよろしくお願いします。」といって頭を下げる・・・たしか、ウィン、だっけ？
「いやいや、どこをどーすればこんな話になるの？」

――――――――――事情聴きとり中――――――――――

「――――――――なるほど、大体わかった。」
あのあと、隼人は椿さんと帰り、俺の家のリビングに俺がエリアとウィンが向かい合って。座っている。・・・この子の名前が『雅（みやび）ウィン』。どうやら隼人達にエリアが住んでるところを教えてもらっていたらしい。そうじゃないと、判んないよね。ふつう。
「だから、この子も今日からこの家で暮らすことになったの！」あれ？決定済み？
「タイム。決定権は俺がもっているはｚ」
「・・・お願いします。」
俺の言葉が遮られた。
「うん、だからだｎ」
「ほら、ウィンちゃん、だから言ったでしょ？『うん』っていってくれるって！」
「あの、さっきのはそういう意味ではｎ」
「・・・ありがとうございます。」
合計3回も俺の発言権が奪われた。
「ね、いいよね、祥くん！」
「・・・もう、すきにしてくれ・・・」

・・・いまさら、なにを、いえようか・・・

★

【この邪教徒、どうしまつするか・・・】
翌日、学校に着いた俺を待っていたのは縄で縛られて畳に転がされ

ている隼人と、異端審問会だった。
・・・あの野郎、また何か言いやがって・・・

★

「強烈な仕置きだった・・・」
隼人がほざく。ふん、その程度、ミツバチのハチミツよりもあまいわっ！
「俺、お前らとクラスが別でよかったわ」陸。
「同意」山下。
言い忘れてたけど、俺と隼人がFクラス、陸がCクラス、山下がAクラスだ。
それで思い出したけど・・・
「なぁ、隼人。学園長に、教室設備の相談しない？Fクラスとはいえ、このままだとカゼひくだろう？」
「掛け合っても無駄だとおもうけどな。設備がほしいんなら、試召戦争に勝てってやつだ。」
「けど、さすがにこれだと勉学に支障をきたしたりするんじゃない？」
「ま、そーなると本末転倒だよな。」
「だめもとで、かけあってみない？せめて、割れてる窓の交換とかは普通はしてもらえるはずだよ」
「そーだな。いっちょいってみっか。」隼人にしては珍しく話がわかるじゃないか。
「お前ら・・・さっきまで敵対してたんだろう？」陸が言う。
「昨日の敵は今日の友ってことば、しってる？」
陸に問い正すように言う俺。すると、
「お前らは敵と仲間の入れ替わりが激しすぎるんだよ・・・」なんだいその呆れ顔は。・・・あえて否定もしないが。
俺の割合で言うと、敵対7、仲間感3ってとこだ。
そんなこんなで、俺と隼人は学園長室に向かった。

★

「「このクソババァァァアアアアア！！」」
ところ変わって学園長室。
「まったく、うるさいガキどもだねぇ。」
といって顔をしかめる藤堂カヲル（クソババァ）。このババァが学園長だ。
「うるさいぞ、しずかにしろ、荻野、久斗！」
といって檄を飛ばしてくる鉄人。・・・本名は、西村　宗一（鉄人）だったハズ。
そんなことより・・・
「かわいい生徒の頼みを、断るなんてアンタ本当に学園長か！」

こんな具合に。

「学園長、西村先生、お願いがあります「却下だ」。僕たちFクラ「不許可だ」スの教「無理な話だ」室の設備「あきらめろ」を少し「駄目だ」でいいです「拒否する」から向上「無理を言うな」してほしい「嫌だ」――――――って断りすぎじゃないですか？！一回のお願いに8回も断られたのは初めてですよ畜生！」

みたいな。

「僕らは鉄人みたいに筋肉バカじゃないし、ババァみたいにおいぼれてないから仕方ないじゃないですか！」俺が言う。
「そうですよ。2年を代表するバカの言うとおりです」と、隼人が言う。・・・ちょっとまったーっ！
俺もそこまでバカじゃない。
「そうです。2年を代表するカスの言う通りです！」と、俺が言う。
ふん、ざまぁ見やがれ！

「何言ってんだ祥平。お前は学校を代表するバカじゃないかっ！」
「いやいやいや隼人。きみは学校を代表するカスじゃないかっ！」
「「・・・・・・・・・・・・・・・！！（胸倉のつかみ合い）」」
「ないな。祥平、お前こそ地球を飛び出して宇宙レベルのバカだな。」
「黙れ隼人。きみは学校どころか世界に通用するレベルのカスだよ。」
「「・・・・・・・・・・・・・・・！！（ガンのくれあい）」」
「お前ら、さっきまで共同戦線はってたのに・・・」陸が言う。
「すぐにくずれた。」山下が言う。
「「・・・・・・・・・・・・・・・！！（メンチのきりあい）」」

「・・・とりあえず、教師の呼び方から変えろ。」
なんだ。そんなことか。隼人も気がついたようだ。
「よろしく宗くん☆【パキュッ】」
「まかせた宗一♪【ポキュッ】」
「教師をファーストネームで呼ぶな。」
「「大事な右手がぁあああ！！」」
万力のような握力で俺と隼人の手の骨が粉砕された。
くそっ。それならなんて言えばいいんだっ！

「・・・なんか、この光景を見てると3年前のガキどもをおもいだすねぇ。」
「学園長。あいつらは、これよりももっとだめでしたから。特に吉井と坂本は。」

「そうさね。あいつらはほんっとバカだったからねぇ。」
・・・なんか、俺たちそっちのけで昔話に盛り上がってるな・・・
畜生っ
「センセー、あいつらの言い分も一理あると思います。」ナイス助け舟だ陸っ！
「同意」いいぞ山下っ！
「だが、これは学校の取り決めだからなぁ・・・」
よし、鉄人が甘くなってる！もうひと押しだっ！

「頼むぜてっちゃん★【パキュッ】」
「頼んだてっつん♪【ポキュッ】」
「2回も同じことを言わせるな」
「「無事だった左手がぁあああああ」」
チクショー、これじゃぁ手が使えないっ！

「・・・まぁ、こっちの頼みも聞くなら、きいてやってもいいけどねぇ」
「「お断りします」」
隼人と声がそろった。
「・・・つれないねぇ」
「・・・一応、内容は聞こうか。」
「・・・まぁいいさね。・・・召喚システムのことなんだけどね・・・」

【2】に続く

第2問　俺と子供と召喚システム【1】（後書き）

登場させるキャラ、学園長（ババァ）と鉄人（西村先生）でした。
・・・ちなみに、この物語、明久と雄二がいたころから3年が経過してるんですよね。それなのに鉄人は鉄人、ババァはババァでのこってるなんて・・・

次回予告！『俺と子供と召喚システム【2】』
お楽しみに！

第3問　俺と子供と召喚システム【2】（前書き）

学園長（ババァ）に教室設備の向上の交渉に行った隼人と祥平。

しかし、彼らはそこで両手の骨を鉄人に粉砕されて・・・？

「・・・召喚システムのことで、ちょっとね・・・」byババァ

第3問　俺と子供と召喚システム【2】

「・・・まぁいいさね。召喚システムのことでちょっとね・・・」

ババァが何か言ってる。うん。明らかに被害は大きいだろうな。

「んで、そのシステムの調整に俺たちに協力してほしい、と。」隼人が言う。

「頭の回転はまぁまぁじゃないか。クソジャリ。そういうことさね。」

うん。生徒をジャリ扱いした。・・・隼人の事だから許すけど。

「んでババァ。仮に俺たちがそれをやったら、設備向上はしてもらえるのか？」当然の事を聞く隼人。

あたりまえじゃないか。そんな危険を冒すんだから、「いや。設備向上はしないさね」なにぃぃぃ！

「そんなぁ！ひどいですよババァ長！」つい口がすべった。

「その呼び方は今までで一番ひどいさね！？」

しまった。変な混じり方になってしまった。

「まぁ、点数が低いあんたたちバカどもが協力してくれれば、こちらも何のリスクもなく実験できるわけさね。」

「・・・だってさ、隼人。バカって君のことなんだから、呼ばれてるよ？」

「いやいや祥平、バカってのはおまえのことだろ」

「あんたら二人ともさね」
「「そんなバカな！？」」
「なんでそんなに驚けるんだい？！当然の評価じゃないか！」
コイツと同等なんて心外だ。撤回を要求したいくらいだ。
「それで、ババァ長。俺たちが協力すれば、何してくれるんですか？」俺がきく。
「そうさね。必要最低限の学習設備、割れてる窓の補正、黒板の美麗化、チョークの補給はしてやるとするかね。ま、畳とちゃぶ台はそのままさね。」
・・・これって結構良くない？とか思う俺。
「判りましたババァ長。じゃあ、受けますよ。「隼人だけですけど」「祥平だけですけど」」
「「・・・・・・・・・・・・・・・！！（ガンのくれあい）」」
こんな俺らは仲良し二人組。
「んじゃ、今残ってるＦクラスのバカにも手伝ってもらう。これでいいだろう？」
仕方ない。その条件を呑むか。
「わかりました」「ＯＫだ」
「――――ということだから、みんな、協力してくれ。」

★

クラスにいたFクラスメンバーは俺・隼人・エリア・ウィン・高志（ムッツリーニ）・ダルクの6人だ。

・・・椿さんは当然（デフォルト）いたけど。

「点数が高いと何が起こるか分からないから、エリアは遠慮した方が――」

「いや、その必要はないさね。もし危なかったらアタシがフィールドを消すよ。」

なるほど。なら安心だ。

「なんか楽しそうなかんじだね」ダルクがいう。

「あ、ダルク、お前はやめとけよ。こういうのはあんま女子は関わらない方がいい」と、隼人が言う。

「またそんなこというの!?僕は男だよ!」

「・・・（カシャカシャカシャカシャ！）」高志、もといムッツリーニがシャッターを切っている。

「ムッツリーニ、カメラのシャッター、すり減るよ・・・？」俺が言ってやる。

「・・・！おれは、なにもっ・・・！」

「何を撮影してたの？」

「・・・知る必要はないっ！」

「いやいや、ムッツリーニの性格は知ってるから。」

「・・・何の事だかさっぱり分からない・・・！！」

「ともかく、このメンツで実験させてもらうからね。」

「そういやババァ長。俺たちがなにをすりゃいいんですか？」俺がきく。

「しょ、祥くん!?一応この人、学園長なんだよ!?」エリアがいった。
「あぁ、大丈夫。この人、学園長もといクソババァだから。」
「アンタねぇ・・・誰に向かってそんな事いってるんだい・・・」
ババァがいった。
「ババァ長。」
「・・・よし。まずあんたから実験台にさせてもらうとするかね。」
なんで!?俺なんかやっちゃった!?

「そうさね・・・葵、アンタの手、借りるよ」
といってエリアの手を突然俺の手に当ててくる学園長(ババァ)。なんだ?
「久斗、サモンって言ってみな。」
「はぁ。サモン」

・・・なんか無理やりいわされた気がするけど。
すると、俺とエリアの間に、幾科学的模様が現れ、中からデフォルメされたキャラクターみたいなのが出てきた。

「・・・ババァ長。なんですかコレ?」
「あんたらの召喚獣さね」

ああ、召喚獣か。
・・・というか・・・さっきから・・・
「あ、あのさ、エリア。そろそろ手、離してもらっていいかな?なんかす、すごく緊張してるんだ」
「ふぇっ!?あ、ご、ゴメン」
あわてて手を引っ込めるエリアに愛嬌を感じたり。
でもさ。
「なんていうか、エリアそっくりだね」

「うん、そうだね。」顔真っ赤っかのエリア。
「なぁ、ババァ長。召喚獣って、こんな子供みたいなやつなのか？」
俺がきく。
「ほぉ。バカにしてはいい線いってるじゃないか。そうさね。これは子供さね。・・・あんたらの」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・はぃ？
「どどどどういうことですかババァ長！？こここ子供ってｃ；ｓｗｄ；ぺｈｄｓｌん」
「落ち着きなクソガキ。アンタがいくらバカとはいえ、地球上の言語から離れたらおしまいさね。」
「落ち着けるわけないでしょうが、このクソババァ！！」
「だから、これはあんたらの子供をシュミレートした召喚獣さね」
「そういうのは先に言えやこのクソババァ！」
「アンタにいっても「隼ちゃん、いくよっ！サモン！」「ちょっおまっ・・・離せぇぇぇ！」意味ないだろう？」
・・・・・・・・・否定できないっ・・・・・・・・・・
・。
向こうで出てきたのは・・・隼人と椿さんの子供！？—（をシュミレートした召喚獣）
てっきり男の子がでてくると思ってたけど、以外に女の子だった。
元気そうなイメージとか、髪型とかはほとんど椿さんだけど、目の部分だけ違って、とてもきれいな目だけど・・・まさかっっっ！

「ねぇ隼ちゃん、目の部分、昔の隼ちゃんにそっくりだね～」

なにぃぃぃぃぃいいいいいいいいいいいいい！

昔は隼人もあんなきれいな目をしてたの！？いまの隼人の濁りきった目とは似ても似つかないよ！？

「ねぇ、椿さん」「なにかな久斗クン？」

「昔って、隼人もあんなきれいな目、してたの？」「うん、そ～だよ」

「・・・意外」ウィンがいう。そりゃそうだ。

そうやって昔話に花を咲かせていると、

【ねぇ、おとーさん】隼人と椿さんの召喚獣。

「・・・なんだ」隼人。

【あそぼーよー】「いやだ」【ねぇおとーさん】「・・・フンッ」

【うぅ、おとーさん】「・・・」

【・・・ダメ？】「少しだけだぞ」【うんっ！！】「ほら、これでどうだ」

【高ーい♪おとーさんすごーい！】「・・・まぁな。それで、さらにこうだ」

【わーい♪ぐるぐるだぁ♪】　「はっはっは。そうかそうか。それじゃ今度は・・・ハッ！」

向こうで隼人が高い高いをして遊んでいた。

「隼人、楽しそうだねぇ。（ニヤニヤ）」俺。

「またくだよねぇ。（ニヤニヤ）」椿さん。

「・・・素直じゃない。（ニヤニヤ）」ウィン。

「やめろっ！！そんな目で俺を見るなっ！！」真っ赤な隼人。

「いやいや、そんな照れることないよ隼人。（っていうか照れても全然かわいくないし。）こっちまでほほえんでしまうくらいに。（ニヤニヤするくらい）」

こうなれば隼人の親バカは確定だろう。

「祥平！！お前だっておんなじ状況だろうがっ！！」

・・・思い出しやがった、コイツ。

「・・・・・・」エリアが帰ってきた。

「なんでそんなに赤くなってんの！？これって占いみたいなもんだよ！？」

「・・・あ、そ、そうだよね。恥ずかしがることないよね。あははっ」

ミエミエの作り笑い。

「っていうか、この子ほとんどエリアじゃんか。」言ってみる俺。

「このとぼけた感じ、祥平そっくりだな。」隼人。

「なんか気が抜けてるもんね。久斗クンは～」椿さん。

・・・そんな事実は認めない。

「んじゃ、この子たちを一回消すよ」

「え、学園長、まだ私、この子としゃべってないんですけど・・・あっ！」

俺とエリアの召喚獣は姿を消した。

「・・・・・うぅ」

・・・なんであからさまにおちこんでるんだ。

「さて、次はだれにやってもらおうかねぇ・・・」

学園長(ババァ)が妙にノリノリだった。

第3問　俺と子供と召喚システム【2】（後書き）

俺と子供と召喚システム【3】に続きます！

第４問　俺と子供と召喚システム【３】（前書き）

問１
自分のターンのドローフェイズが来ました。
このドローフェイズの前にあるフェイズをなんというか、意味も添えて書きなさい。

【久斗　祥平の答え】
エンドフェイズ

相手のターンの終了フェイズ。このとき処理するカード効果を処理する。

【教師のコメント】
その通りです。

【荻野　隼人の答え】
エンドフェイズ。

特定のカードの処理をする。「エンドサイクロン」など、速効魔法を使うことができる。

【教師のコメント】
正解です。

【夜神　ダルクの答え】
心理フェイズ！
デュエル前のじゃんけんをする際、互いに「お前はグーを出す！」等言って、

相手とじゃんけんで先攻後攻を決める。

【教師のコメント】

普通にジャンケンしたほうが早いと思います。

第４問　俺と子供と召喚システム【３】

★

子供召喚獣の話が終わり、掃除の時間。

「あのクソババァ、なんてことをしてくれたんだ」

俺の隣を歩く隼人が言う。

「まぁ、一応報復はしたし、別にいいんじゃない？」

報復というのは、学園長室（ババァルーム）の引き出しにカギをつけて、『どれかが当たり。頑張ってね♪』という張り紙とともに偽のカギ１００コとあたりのカギ１コ（当然カギ穴も１０個作った。）を混ぜて机の上に置いてくるというものである。きっと学園長（ババァ）も頭と指先の運動ができて、うれしいと喜んでくれるに違いない。

「ふたりとも、あの後たいへんだったもんねぇ。」同じ掃除場所のダルクがいう。人事ですか。

「大変どころじゃなかった気がするけどな・・・」

あの後、俺たちは色々なペアで召喚獣を呼び出された。意地でも椿さんとはしなかったけどね。

隼人に悪いから。

【キーンコーンカーンコーン】

無機質なチャイムの音。やっと掃除が終わった。

「んじゃ、帰るとすっか。」隼人が言う。

「そうだね。」ダルクが言う。

・・・どうでもいいけど、この人たち体力勝負のひとだなぁ。

「そういや、もうすぐ清涼祭だよな」

清涼祭というのは、ここ文月学園の文化祭のようなもので、毎年たくさんの来賓の方が来ている。

「うちのＦクラスは、なにやるんだろうね。」

まぁ、模擬店かなんかだろうけど。

「そーだな。今度のＬＨＲできめるんじゃないか？」

「ま、そうだろうね」

清涼祭・・・か。ちょっと楽しみだなぁ。

そんなことを話しながら、俺たちはＦクラスに向かった。

第４問　俺と子供と召喚システム【３】（後書き）

今回別に召喚システムにふれてないじゃないか。

と思う僕。ごめんなさい・・・

というか、２でまとめればよかった気もします。

出かける用事があったんですよ、昨日は。

・・・

さて、次回予告！

ついに始まる清涼祭！Ｆクラスはなにをするのか、そして学園長（ババァ）が動き出す！

次回【俺とダルクと清涼祭】

お楽しみに！

俺とダルクと清涼祭（前書き）

問2
以下の意味を持つことわざを答えなさい。
【得意な事でも失敗すること】

【葵　エリアの答え】
猿も木から落ちる

【教師のコメント】
正解です。

【有乃　高志の答え】
レンズにゴミ

【教師のコメント】
貴方は何をしているのですか？

俺とダルクと清涼祭

6月。
それは、初夏。
それは、少しずつ暑くなっていく月。
それは、梅雨の始まり。
・・・
この学校では、珍しいシーズンだが文化祭がある。
この時期になると、どのクラスも模擬店の準備などに取り掛かる。
・・・このころ。俺たちFクラスはというと。

『キックオフ！』

サッカーをしていた。

「よし、いくぞっ！隼人、作戦を発表してくれ！」俺。
「OK。まず、お前がコントロールキックで・・・」
俺は小学校、中学校とサッカーをやっていたから、コントロールは少しだけどみんなよりうまいはず。
「お前がコントロールキックで、相手のFW（フォワード）とMF（ミッドフィルダー）の顔面にボールをぶち当てろ！」
どういうことだ。
「それって俺がせめられるじゃないか！」
「手加減は無用だ！ぶちかましてやれ！」

「キミはスポーツマンシップという言葉を知らないのかい！？」
「安心しろ！お前一人が退場になるだけで、相手は６人も負傷するんだ。こっちが有利に変わりはない！」
「それは勝負以前の問題だ！」

『貴様ら、文化祭の出し物もきまっとらんのに、何を遊んでいるか！』

ゲッ、鉄人だ！

「お前か、久斗！」
「これはクラス代表の荻野が決めたんですよっ！どうしていつも俺を目の敵にするんですか！」

といいながら隼人に視線を移す。すると、アイコンタクトでこんなことを言ってきた。

『テツジンノ』

・・・鉄人の？

『アタマニ』

・・・頭に？

『ボールヲ』

・・・ボールを？

『アテロ』

・・・当てろっ！

よしっ。いくぞっ！

「――――――って、それだと俺が怒られるじゃないか！」

コイツはまったく・・・

「はやく、文化祭の出し物を決めろ！」

★

「――――――――――というわけだから、さっさときめようぜ」

なんだかんだいっても隼人の説明力は半端じゃない。

「・・・（サッ）」

「なんだ、ムッツリーニ。」

「・・・ビデオを上映する」

「――――どんなものを？」

「・・・そ、それは言えないっ・・・！！」

とりあえず、却下だろう。

「一応意見だ。祥平、黒板に書いておいてくれ。」

・・・なんで俺？

「ちょ、なんで？」

「なんでもなにも、お前はこういうのにピッタリじゃないか。」
「すまん。やわらかい表現はやめてくれ。」
「パシられ役に最適ってことだ」
「黙れ！その口を閉じてさらに閉じて閉じまくって黙れ！！！」
「んじゃ、候補を上げるか。２つくらい」

よかった。まだチャンスがあるっぽい。

「みんな、候補を上げるから、どっちかに挙手してくれ。」

ほほぅ。どれどれ・・・

『候補１　久斗』

あ、俺だ。でもまぁ、やっぱそうなるんだな。

『候補２　祥平』

また俺だ。　　・・・・・・どういうことだコラ。

「なんでだよ。俺が２個ともって、理不尽だ！！」

「さぁ、どっちにするか、だな。」
「どっちにしてもクズに変わりはないんだが。」
「さぁ、どうするか、だな」

・・・コイツら、クラスメートをクズ呼ばわりしやがった。

「まぁ、そういうことだ。頼んだぞ、祥平」
「仕方ないな。」

黒板に、映像館・・・と。

「メイド喫茶とかは？」ダルクが言う。

「うん。このクラスは５０人中３人しか女子がいないからなぁ・・・・」隼人が言う。

「僕は入ってないよね・・・」

「何言ってんだダルク。きみはれっきとした女じゃないか。」

「だから僕は男だ！」

・・・もうこの下り、見あきたなぁ・・・

とりあえず、メイド喫茶・・・っと。

「簡単なカジノとかは？」

誰かが言う。

カジノ・・・っと。

「中華喫茶。」

中華喫茶、っと。

「んじゃ、お化け屋敷とかは？」

「ふぇっ！」

「なにごとっ！」

エリアがおどろく。

そしてその声に俺も驚く。びっくりした～。

「どうした？」俺がきく。
「えっと、いや、その、だから、」あたふたしているエリア。
「――――――お化けが怖いと。」
「あうあう・・・」

・・・どうやら図星らしい。

「・・・お化け屋敷はやめよう。ひとによるし・・・」

さあ、どーなることやら。

俺とダルクと清涼祭（後書き）

俺とダルクと清涼祭２に続！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2100ba/

俺とテストと遊戯王

2012年1月10日14時51分発行